

【台本を読む前に】

本作の作者である沢 則行さんより、下記のようなメッセージをいただきました。
ご一読の上、台本をお読みください。

.....
「フィギュアシアタの特徴として、
言葉によらない表現をモノとの関係で詰めてゆく、
という性質があります。
なので、ここでご覧いただく台本はあくまでスターティングブロックで、
実際にご覧いただくゴールとしての舞台とはずいぶん異なっています。
その点をご承知おきくださいませ。沢」
.....

OKHOTSK
オホーツク～終わりの楽園
3rd Version of the Script
February 21th 2013

By Noriyuki SAWA

	照明+OHP	音楽+音響
<p>1. 氷、土、骨</p> <p>観客は、青白く光る布で装飾された客席を通って入場する。 海鳴り。氷がきしむ音。 会場全体が巨大な氷の中に閉じ込められている感覚。 氷の厚さにムラがあって、射し込む太陽光に強弱が出るよう に、青い光、緑の光の明暗が方々で明滅している。 客席正面には舞台全体を多い尽くすひとときわ大きな布。</p> <p>やがて会場が暗くなると、その大布に女性の手の影が映る。 その手から土(砂)がこぼれ落ち、映し出される。 一面の砂。</p> <p>砂の上に指で描かれる波の紋様。大きな魚の形。そしてそれを追う小船と漁師たち。</p> <p>それらに重なるように描かれるおだやかな女性の横顔。 そして向かい合う男性の横顔。</p> <p>手の影は砂絵を静かに刷ける。 下地にいくつもの人骨がちらばっているのが見える。</p> <p>大布の前に遺い手があらわれ、骨のいくつかを手に取る。 静かに耳をかたむけ、骨から何かを聞く様子。 やがてそれらをひとつの体に組み立て上げる。 骨は姫長の姿になる。</p>		<p>Treizième Concert III. Saraband (R) ?</p>

2. はじまりのエクソダス

怠惰で凶暴な人の声、またそれに似た楽器音が聞こえる。
客席が暗くなつて、正面の布に影絵が映る。
大きな丸太を何本も担いで、使役に耐える人々の群れ。
兜にぴんと立った鳥の羽根飾りをつけた兵隊たちが、鞭を打つ。

やがて、ひとりの男(役者・沢)が、影絵の布をかいくぐつて、使役の列から逃れて出てくる。
さらに遠くへと歩き始めたところで、赤ん坊の泣き声。
振り返ると、使役に耐える女たちと彼らの胸に抱かれた赤ん坊(影絵)が見える。
女たちに鞭を打つ兵士。
男はためらった末に、ふたたび布の裏側に走りこむ。
ひとりの女が赤ん坊を必死に手渡す。
悲鳴と血しぶき。
布から転がり出る男。腕には赤ん坊。
男は一瞬振り返り、意を決して走り去る。

海鳴り。

男が丸木舟に乗つて海に漕ぎ出す影絵。
はるかに島影の絵が重なる。
島影は、海中を遊泳する多くの魚、空を飛ぶ海鳥に変る。
豊かな海の音楽。

大布には再び一面の砂。
搔き分けられて、今度は地図となる。
南北が反転し、大陸から島へ向かう一本の航路が引かれる。
そこを進む丸木舟。
男が抱く赤ん坊の影絵に、遣い手が抱える姫長の人形が重なる。静かに消える影絵。

3. 大魚

大布が持ち上がり、現れる能舞台。
橋掛かりから巨大なオオカミ魚が泳ぎ入る。
振り返った姫長、鈎を手に取り、本舞台にのぼる。
迎え撃つ姿勢。
姫長は魚に何度か鈎を打ち込もうとするが、暴れる魚にねらい
が定まらない。
巨大なヒレにはじかれる姫長。
しかし、必死にしがみつき、魚の背に登る。
回転鈎を打ち込む姫長。
大きく身体をよじる魚に投げ出される。
が、綱を手に追いすがる姫長。
ともに海中に沈む。
姫長が大魚の口に長剣を突き立てる。
と、血しぶきの中から人間の姿が見える。
のたうつ大魚の口が裂けると、ひとりの男がはじき出る。
男の身体を抱きとめて、海流に呑まれる姫長。